

2026年3月3日「健康と病いの語り」第3回研究会

報告者：酒井美和，テーマ「クローン病患者のテキストからみる男女の差異経過報告」

酒井美和氏の報告は、きれいな属性分析結果もさることながら、クローン病の人々のトイレ、食事、生活時間、学校・職場で体験する困難などに関する、きわめてリアルで具体的な説明が興味深かったです。公共施設のあり方、難病政策の根本問題などについても言及されました。多方面から活発な討議がなされたが、ここでは1点取り上げ、私のコメントを付します。さらなる議論の素材としていただければ幸甚です。

属性別分析をするとはどういうことか。例えば、性別、所得、学歴、家族構成などの属性別に分けられた集団間で、結果に違いがあるかどうかを見るとしよう。そこで違いが見られたからといって、それはただちに解決すべき問題というわけではないのだが、とりあえず、統計的に確かな違いが見られると、興味深い、よき分析結果がでたとされる。多くの場合、それは世間の常識を裏打ちするものであり、研究者自身を含めて人々に納得されやすい。

でも、だからこそ、統計的差別に留意する必要がある、と警告したのはケネス・アローだった。そのような懸念は、統計に限られない。例えば、倫理学でも起こった。それまで正義原理からの逸脱と見なされがちだった女性の態度を、ケア倫理という名で捉え返すことは、道徳における女性の地位を高める一方で、正義の原理は男性的、ケアの倫理は女性的という性差固定的な言説を強めることにもなりかねない、という懸念も生んだ。

属性による違いは、多くの場合、社会的・歴史的に形づくられた傾向性の違いであって、固定的なものではない点に留意する必要があるだろう。ケイパビリティ・アプローチの面白さは、属性による違いを、いったん個人に戻して、個人のケイパビリティの大きさ・形状に影響を与える諸要因を、改めて探る、フレームワークを提示する点にある。

例えば、女性は外出時機能がより高く、男性は在宅時機能がより高いというような傾向性が見られたとしよう。この結果は、女性を切り口として、在宅時機能値を低める理由の探索、あるいは、男性を切り口として、外出時機能値を低める理由の探索へと向かわせる。そこで明らかにされる理由は、外出しても、在宅しても個人が一定の機能値を実現するためにはいかなる社会的・制度的支援が必要かという課題を示唆することになる。